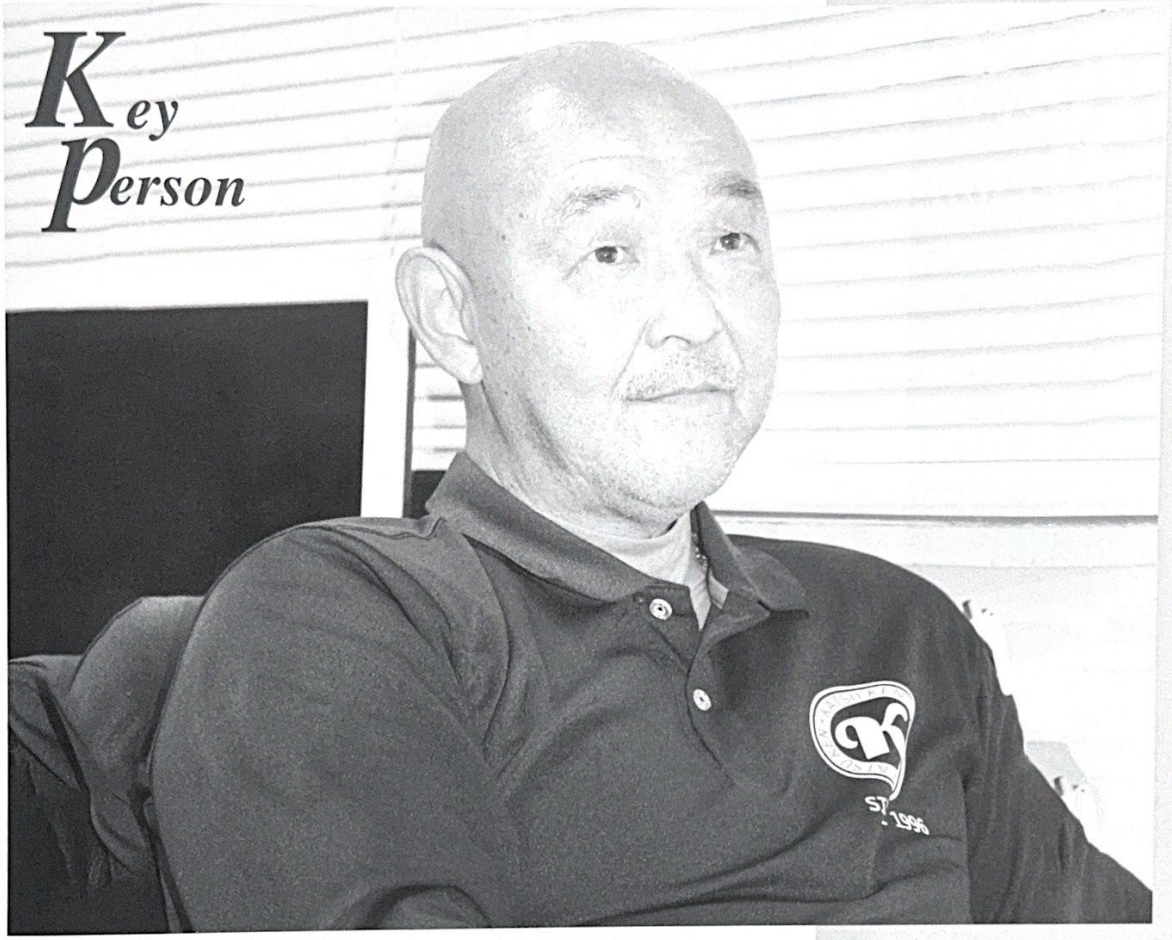

㈱克建　代表取締役

鳰 克宏

仕事において、鳰社長が大切にしているのは「人との繋がり」だ。
「建設業界では、一つひとつの現場が勝負。
その現場が終わった後、次の仕事がある保証はありません。
だから次に繋がるように、人を大切に誠実な仕事を続けていく必要がある」と社長は語る。
そうして日々のご縁に感謝しながら義理と人情を重んじる姿勢を貫き続けており、
また、人との繋がりの大切さは今後何十年経とうと変わらないからこそ、
次世代を担うご子息たちにも、その重要性を伝えている。
そんな社長が牽引しているから『克建』は30年近くに亘り信頼を集めているのだ。

(対談記事は62～63頁に掲載)

「人との繋がりや義理人情の大切さは変わらない。だから、その重要性を次世代にも伝えています」

株式会社 克建

滋賀県彦根市高宮町 2144-1
URL：http://katsuken-hikone.com

土木工事や解体工事などを手掛ける『克建』。1996年の創業以来、30年近くに亘って地域のまちづくりを支えてきた企業だ。歩む中では困難もあったが、人との繋がりを大切に歩んできた鳰社長。現在はご子息たちも加わり、若手が働きやすい環境の構築にも努める。本日は社長とご子息である勇輝取締役にダンカン氏がインタビュー。

▲「克建」で活躍するスタッフの皆さん。若手からベテランまで、人材の層の厚さも同社の強みの一つとなっている。

人との繋がりの大切さを伝えながら働きやすい環境を構築し次世代に紡ぐ

建設業界の様々な仕事を経験し独立 強い覚悟で仕事に励み続ける

――『克建』さんの事業内容からお聞かせいただけますか。

（克） 土木工事を主軸に、解体工事やとび・土工工事、外構工事、造園工事、舗装工事などを手掛けています。特に公共工事の実績が多いです。

――鳰社長は建設業界一筋に歩んでこられたのですか。

（克） 幼少期は土木関係の仕事がしたいと考えていましたが、実家が縫製業を営んでいたため学業修了後は家業に入ったんです。しかし縫製業界全体が下火になってきたことから23歳の時に家業を出ることになり、そこからはずっと建設業界を歩んできました。

――建設関係のどの分野で修業を積んでこられたのでしょう。

（克） 将来的な独立を視野に、最初は親戚が経営する建設会社で舗装工事を経験しました。「まずは3年頑張れ」と言われましたが、若かったこともあって反発心が強く2カ月で辞めてしまい（苦笑）、次は友人の紹介で当時需要の高かった下水工事を1年半ほど経験。さらに他の技術も身につけようと、別の会社で土木工事に携わりました。そうして知人を頼りながら様々なノウハウを培い、27歳で独立。ありがたいことにそのタイミングで偶然お客様から「この仕事を請け負ってくれないか」と言っていただいたので若い衆1、2名と一緒にスタートしたんですよ。当時は結婚したばかりで妻には苦労をかけましたが、「これしかない」という覚悟で仕事に取り組んできて、現在に至ります。今は長男と次男も当社で活躍してくれているんですよ。

人を大切に次に繋がる仕事を――「人」の大切さを次世代にも伝える

――創業からでは30年近く、法人化からはちょうど10年と伺っています。その間、色んなことがあったと思いますが、「この時は特に大変だった」というのはどんな時でしたか。

（克） 法人化したタイミングで、私の体調が悪くなった時が大変でしたね。病院を受診したところ、ガンが見つかりまして。即入院になり、半年間闘病生活を送りました。

――そんな大変なことが……。今はもう大丈夫なのですか。

（克） ええ。お陰様で快調です。それに病気を経験したことで、今までの考え方や仕事の進め方が変わるなど良い面もありました。例えば、これまで私は何でも自分でやらなければ気が済まないタイプでしたが、全て自分で担うのは無理があります。ですから人を信頼して仕事を任せるようになりましたね。退院した当初は身体も思うように動きませんし、私は営業に専念し、取った仕事を自社でこなしたり下請けの方々に回したりするようになりました。現場は番頭が統括してくれており、私も頼もしく思っています。

――ピンチをチャンスに、仕事のスタイルを変えてより飛躍されたのですね。ご子息から見て社長はどんな方ですか。

（勇） 苦労や大変な姿はあまり見せない人ですね。いつも活き活きと働いているので、自然と私も同じ道に進みたいと思うようになり、入社しました。父は職人としても人間的にも魅力があって、周囲の方々からの信頼も厚いですよ。

――多くの人から信頼される要因は何だと思いますか。

（克） 人との繋がりを大切にしているからでしょうか。建設業界は一つひとつの現場が勝負です。その現場が終わった後、次の仕事があるという保証はどこにもない。だからこそ次に繋がるように人との繋がりを大切に、誠実な仕事を続けなければいけません。その点は、次世代を担う息子たちにも伝えています。

――後継者に悩む企業は多いですから、次世代がいるのは心強いですね。

（克） 本当にそう思います。この業界は3Kが当たり前で、土曜日が仕事だったり、1日7時間勤務で週6日みっちり働いても生活が厳しかったりということもよくあります。それではますます若手が入ってきませんから、当社では土曜日は休めるようにするなど、今の時代に合った、若手が働きやすい環境づくりに注力していきたいと考えています。

――次世代が働きやすい会社は未来に残っていくと思うので、ぜひ頑張っていただきたいです。最後に今後の展望を。

（勇） 現状維持は衰退の始まりですから、仕事の幅を広げたりしながら少しでも右肩上がりを継続したいですね。そして父のような経営者になりたいです。

――父親として、すごく嬉しい言葉ですね！ それに、さらに上を目指していかれるという目標が頼もしいですよ。

（克） 職人が飽和状態だった私たち世代の引退に伴い、競合他社も減ると思いますから、その時が若い世代にとってチャンスでしょうね。息子たちがどこまで頑張りを見せてくれるか、私も楽しみです。

（取材／2024年6月）

代表取締役 鳰 克宏

取締役 鳰 勇輝

ゲスト ダンカン

COLUMN

自身が病に倒れた時が、事業の一番の窮地だったと語る鳰社長。早めに病気が見つかったのは、幸運な偶然が重なったからだ。

学生時代は野球に打ち込んでいたという共通点がある社長とご子息たち。法人化した当時、ご長男は高校3年生で練習を頑張っていたものの残念ながら高校野球への出場が叶わず野球部を引退することが決まった。その時、社長も体調を崩していたため、息子の野球生活が終わったからと病院を受診することに決めたのだ。元々社長は野球で運営に関する役員を務めており月8回は大阪に通っていたので、もしご子息が高校野球に出場していたら、きっと受診が遅れていただろうと社長は語る。親子の絆と野球が、事業と社長の命を救ったのだ。

After the Interview

「ご子息たちが現場で活躍されている一方で、鳰社長の奥様も社内で事務関係の業務を全て担っておられるそうです。「普段は照れてしまってなかなか伝えられませんが、妻の支えは本当にありがたいですね」と社長は語っておられました。親子・ご夫婦の絆の強さが伝わってくる対談で、私も温かい気持ちになりましたよ」 ダンカン・談